弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

看護学部・看護学科
髙橋　義孝

作成日　2024年1月30日

1. 教育の責務

2013年（平成25年）度に本学看護学部に採用され、看護学分野・精神看護学領域を中心に実習を主に担当してきた。また、基礎看護領域でも実習を担当し、学生の視点に立った教育を目指してきた。

授業以外では、国際交流委員会、しろがね会等の活動を行っている。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
精神看護学実習	3年	実習	通年	精神看護学
看護統合実習	4年	実習	前期	精神看護学（認知症）
基礎看護学実習Ⅰ	1年	実習	後期	コミュニケーション
基礎看護学実習Ⅱ	2年	実習	前期	看護過程展開

2. 教育の理念

私は実習中心に、臨床の中で学生と接してきた。座学では見られない学生と接し、実際に患者と接する学生を目の当たりにし、学生の悩みを解決することを目標としてきた。

中でも精神領域は心の病であり、患者も教科書通りにはいかない疾患が多い中で、その人と関わっていくことは学生にとって非常に難しいことと考える。そんな中で私は、学生一人一人の考えを傾聴し、学生個別の教育を心掛けている。

2015年に脳出血を患ってからは、患者の立場に立った看護を心掛けて指導している。

3. 教育の方法

基礎看護学実習Ⅰでは、初対面の学生がほとんどであり、また初めての実習ということもある為、早期にその学生の特性を把握し、看護師の本質、患者とのコミュニケーションの方法など、それぞれの学生に合わせた指導を心掛けている。

基礎看護学実習Ⅱでは、看護の基盤となる看護過程を主体として、看護技術、コミュニケーション技術等、実際の業務に関連させて指導するように心掛けている。また、私自身の脳出血の既往から、患者の立場に立った看護も指導している。基礎看護学実習Ⅰと同様に、初対面の学生がほとんどである為、早期に学生一人一人の特性を把握するよう心掛けている。

精神看護学実習では、精神看護領域の特性を活かし、患者に対して傾聴、共感するように促し、患者との距離感をしっかりと意識して関わるように指導している。また、講義で学んだ疾患の特徴と関連付けた関りを心掛けている。

看護統合実習では、実務に即した実習を通して看護実践能力を高め、これまでに学んだ知識・技術を統合し、医療チームの一員としての看護専門職の在り方を探求することを意識して指導している。

4. 教育の成果

授業評価はしていないので、学生からの評価はわからないが、10年間で私が担当した学生は単位取得できている。
基礎看護学実習Ⅰでは、学生の特性を把握し、患者とのコミュニケーション方法を重視して関わり、成果を挙げている。
基礎看護学実習Ⅱでは、基礎看護実習Ⅰと同様に学生の特性を早期に把握し、看護過程を主として、看護技術、コミュニケーション技術などを、エビデンスを基盤とし、成果を挙げている。
精神看護学実習では、精神科の特性でもある患者との距離感を大切にし、傾聴、共感をして、患者との信頼関係を築くなど成果を挙げている。
看護統合実習では、医療チームの一員としての看護実践能力を高め、医療チームの一員としての看護専門職の在り方を探求することで、成果を挙げている。

5. 教育の改善

基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱでは、今まで以上に初対面の学生の特性、特徴を把握し、学生の不安を解消できるようにしていきたい。そして、その後の臨床実習にスムーズに移行できるようにしたい。
精神看護学実習、看護統合実習では、講義で学習したことを実践から学び、看護専門職として医療チームの一員になれるようにしていきたいと考える。
今後も、学生の視点で考え、考えを傾聴していくように心掛けたい。

6. 教育の目標

まず、学生が実習を楽しく感じることが大切である。精神科は、暗い、怖い、汚いといった印象を持つ学生が多い。マスコミからの情報や、誤った情報も原因の一つである。そのためにも精神科という負のイメージを取り除く指導をしていきたい。
　常に患者の目線から看護し、患者の心に寄り添った看護師を育てていきたい。

【資料】

1. シラバス